なぜ、データマネジメントは失敗するのか?
成功のための5つのステップ
～成功まで“伴走”するNSWのデータマネジメント～

デジタルトランスフォーメーション(DX)は、従来のIT導入とは違って終わりのない半永続的な取り組みです。そのため、「どこから手をつけていいのか分からない」というユーザーも多いようです。さらにDX推進の根幹となるのは「データマネジメント」であることを見据えてツールを導入したものの、期待していたほど成果が出てこないケースもしばしばあります。本資料では、NSWが考える、データマネジメントを成功させるポイントについて紹介します。

DXにおける、データマネジメントの重要性

DXの定義はさまざまですが、1つには「データドリブン経営の実現」ということが挙げられます。日々ビジネスで発生するデータを生かして業務効率を上げ競争力を向上させる、あるいは新しいサービスを構築し顧客に提供するといったことです。

そう考えると、DXを支えるシステムはすなわち、データマネジメントを効率化させるシステムということになります。データマネジメントシステムは各業務システムにあるデータを集約・一元管理し、可視化できる機能を有します。それらの機能によって、迅速にデータ活用でき、業務や経営に活かせるようになります。

なぜ、データマネジメントプロジェクトは失敗するのか?

最近多くの企業で「DX推進室」といった名称の部署が設置されるようになりました。データマネジメントシステムは、このDX推進室が既存のIT部門と協力して進めていくことが多いです。

しかし万全の体制で進めていたはずなのに、「何カ月経っても成果が見えてこない」「システムが完成しても業務に利用されていない」といった失敗事例もよく耳にします。なぜそうしたことが起きるのでしょうか。

前者の成果が見えてこないというケースは、データマネジメントを全社的に実施するという「大きな目標」を掲げてしまった場合に多いようです。プロジェクトが大がかりになりすぎて、導入ソリューションの選定、各部門への説明・説得、既存のIT部門との調整などに時間がかかっているということが考えられます。

また、後者の業務に利用されていないというケースでは、ソリューションやツールの導入そのものが目的化してしまっていたということが挙げられます。「どんなデータを、どう活用し、どんな成果を挙げたいのか」というテーマが抜け落ちてしまい、ユーザー部門にとって、使う価値を感じないものになってしまうことが原因です。

目的は、ソリューションやツールを導入することではなく、あくまでもデータドリブン経営に向け始動することのはずです。その目的を見失わないためにも、データ活用の真のビジネス目的を整理することが重要になります。

データマネジメントを成功させる5つのステップ

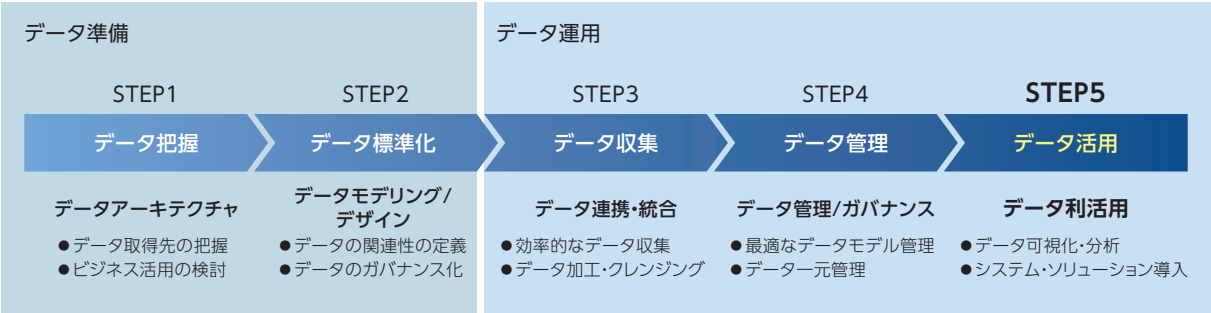
では、データマネジメントを成功させるには、どうすればよいのでしょうか。

NSWではデータマネジメントのプロセスを、「データ把握」「データ標準化」「データ収集」「データ管理」「データ活用」の5つのステップで考えています(図1)。

データマネジメントというと、まずデータ収集・管理・活用といった運用フェーズを想起しがちですが、その前段階のデータ把握(データ取得先の把握、ビジネス活用の検討)・標準化(データの関連性の定義、データのガバナンス化)といった準備フェーズこそが、とても重要です。

NSWに運用フェーズの相談を寄せられる場合がありますが、データ取得先やデータをビジネスにどう生かすかなどをヒアリングすることで、この準備フェーズの重要性に気づくケースも少なくありません。単に「システム間のデータ連携をしたい」という要望だったのに、話をよく聞いていると、実はそのビジネス目的実現のためには別の方法が適していたということも少なくありません。

そもそも、データ収集・管理を、いままでに全くやっていないという企業はないでしょう。個々の企業のデータ収集・管理の現状を把握し、データをビジネスにどう生かすか、DXで何を成し遂げたいのかを明らかにしたうえで、データマネジメントに取り組んでいくべきなのです。

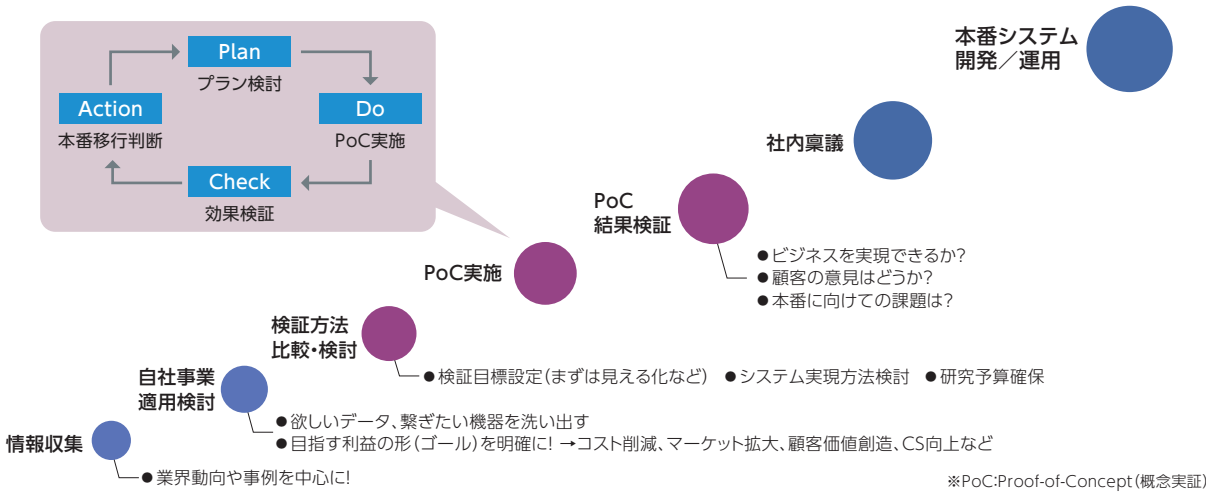


【図1】NSWが考えるデータマネジメントの5つのステップ

スモールスタートで、小さな成功を積み重ねる

データマネジメントシステムを実際に導入する際に、NSWが推奨しているのが「アジャイル型DX導入モデル」です(図2)。これは、一部の業務システムからスモールスタートすることでアジャイル的にPoC(概念実証)を実施し、小さな成功体験を組織全体で獲得することが目的です。

部分的にでも事前にデータマネジメントの実像や成果を多くの人に見てもらう、試してもらうことで具体的なイメージを共有でき、本当に連携して役に立つシステムは何なのか、どんなデータが必要なのかを明確化するわけです。



【図2】アジャイル型DX導入モデル

目的にあったデータマネジメントシステムを提供

データ収集・管理・活用の構築においては、企業ニーズに応じたデータマネジメントシステムを実現するために、さまざまなツールやソリューションを組み合わせ、環境を実現します(図3)。

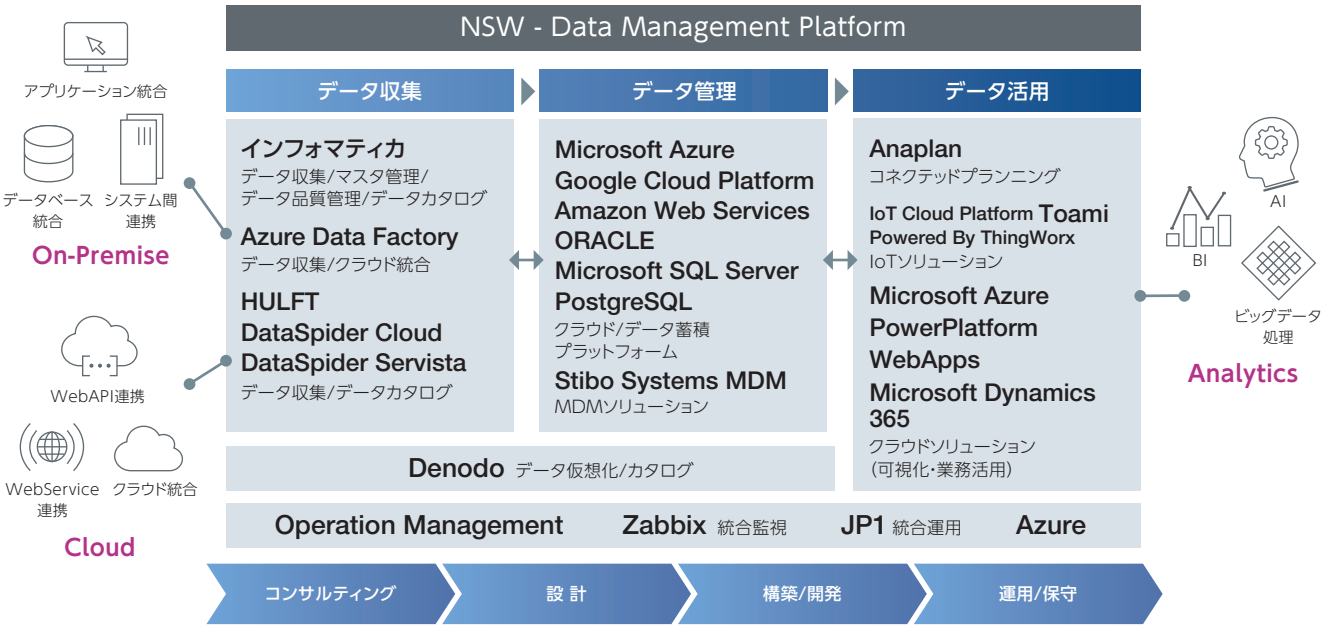
データ収集のステップでは、例えばスモールスタートでデータマネジメント/統合を始めたいという場合には、データ連携ミドルウェア「DataSpider」を推奨しています。DataSpiderはノンプログラミングで連携処理が開発でき、連携先も豊富なツールです。

また、グローバル連携を含めた全体最適を意識したデータマネジメントを実現したいという場合には、「インフォマティカソリューション」を活用します。インフォマティカはデータ統合ソフトウェアを提供する世界有数のプロバイダーで、グローバルでの実績も豊富です。NSWでは、2017年6月より認定コンサルティング&SIパートナーとしてパートナー契約を締結しています。

さらに、クラウドネイティブを意識し、クラウドでデータ管理をしたいというニーズに対しては、Microsoft AzureのPaaSを組み合わせたシステムを構築したり、経営者・利用ユーザーへのデータ提供をスピーディに実施したいという場合には、データ仮想化ソリューション「Denodo」を活用するなど、データ仮想化技術により既存データ環境に変更や複製をすることなくリアルタイムにデータを統合・配信するといった選択肢が考えられます。

このようにNSWはデータマネジメントに関する多様な顧客ニーズ、課題解決のための具体的なソリューションを用意しています。これらのソリューションは、海外も含めた活用事例が豊富にあり、高い実績を持っているものばかりで、そうした基準を満たすソリューションを企業ニーズに合わせて組み合わせて提案しています。

あらゆるデータ管理が可能なデジタルプラットフォームを提供し「デジタルトランスフォーメーション(DX)」を実現



【図3】NSWのデータマネジメントソリューションマップ

DXの成功に向けて、顧客企業に「伴走」するNSW

NSWでは、前述したようなさまざまなツールやソリューションを組み合わせて、個々の企業に最適なデータマネジメントシステムの構築・運用をサポートしていますが、提供方法をメニュー化しているわけではありません。あくまでも顧客企業のデジタル化の目的に合わせたツールやソリューションを選定していきます。

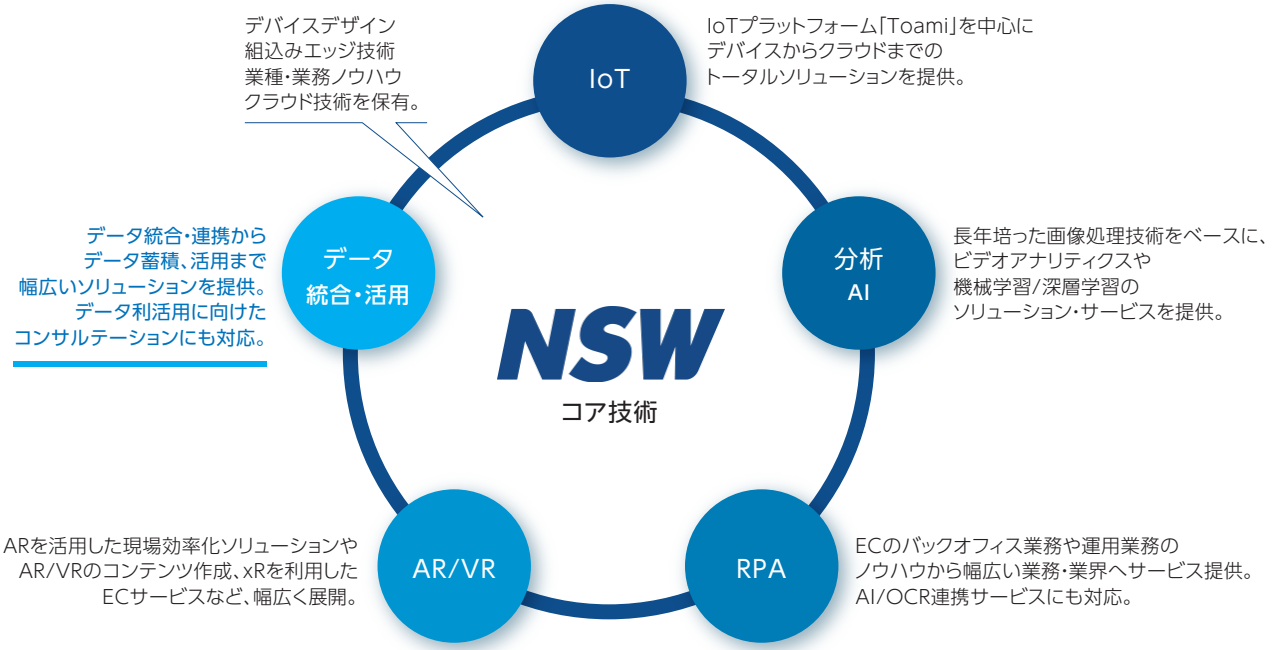
例えば、DXの実現に向けて「現在のデータ基盤の運用が適正なのか」という不安を感じている企業に対しては、データ基盤の状況をコンサルティング目線でアセスメントすることも可能です。また近年では、システムの内製化ニーズもあり、自社スタッフの一員としてDX化を共に推進してほしいという要望も増

えてきています。スキルのあるスタッフを新たに雇用するためには大きな負担がかかります。NSWのスタッフと共働することで、自社にノウハウを蓄積することにもつながります。

繰り返しになりますが、企業がDXやデータマネジメントを推進する際には、単にツールやソリューションを導入すればよいというものではありません。データマネジメントの準備から運用におけるさまざまなステップにおいて、企業それぞれの独自の要望・要件に合わせた対応が必要となります。

そのときに役に立つのが、数多くのデータマネジメントプロジェクトを経験して蓄積された知見、すなわち自社の目標に向かって伴走してくれるパートナーの存在です。NSWでは、データマネジメント部門に70名の人員を配置し、コンサルティングから製品導入、運用設計・運用支援、開発にいたるまでワンストップで対応します。また、社内他部門との連携により、先進技術を活かした幅広いデータ活用が可能です。

データマネジメントを始めたい、データマネジメントを再検討したい、DX推進に向けたITパートナーを必要としている——そんな時は、ぜひNSWをお役立てください。



【図4】NSWがもつデジタル技術の活用

NSW株式会社
東京都渋谷区桜丘町31-11
サービスソリューション事業本部 営業統括部 第二営業部
TEL:03-3770-0096
https://www.nsw.co.jp/